ちょっとくわしく！

古墳と埴輪（こふん はにわ）

古墳がたくさんつくられた時代を「古墳時代（こふんじだい）」と呼びます。今から約1,700～1,500年前、古墳時代の中心（現在の東京都のような場所）は関西地方にあり、リーダーは**大王**（おおきみ）と呼ばれていました。関西から離れた地域にも、それぞれ**豪族**（ごうぞく）と呼ばれるリーダーがいて、大王と豪族の関係が強くなることで各地方にも大きな古墳がつくられるようになりました。

古墳時代は約350年続きますが、それぞれの時代・地域で様々な古墳がつくられました。富津市にある「**内裏塚古墳群**（だいりづか）」は5世紀から７世紀にかけて、かぎ穴形の**前方後円墳**（ぜんぽうこうえんふん）のほか、丸い形の**円墳**（えんぷん）、四角い**方墳**（ほうふん）など、49基の古墳がつくられました。最大の古墳は「**内裏塚古墳**」で144mもの大きさです。

市原市山倉1号墳出土の埴輪

成田市南羽鳥正福寺1号墳出土の埴輪

『千葉県の歴史　考古４』より転載

都出比呂志提唱

『古墳時代ガイドブック』若狭徹2013より転載

上の図は古墳の階層性を示しています。様々な種類の古墳がありますが、「前方後円墳」が一番位が高く偉い人が葬られたと考えられています。大王との強いつながりをもつ豪族が前方後円墳をつくり、その影響下にあることを示したとされています。

多くの古墳のまわりには「**埴輪**（はにわ）」が並びます。古墳時代のはじめは筒状の**円筒埴輪**（えんとうはにわ）などがつくられ、次第に家や道具、動物や人の形をした「**形象埴輪**（けいしょうはにわ）」もつくられるようになりました。古墳は死者がねむるお墓です。埴輪は古墳の崩落防止やお墓との境を示すといった実用的な役割のほか、死者のたましいを守る意味もあったと考えられています。